

ふる筆のかさはあれどもかみな月まぐれをふせぐ美濃のをたまはれ

〔隨齋諧話坤〕増山井四季の詞、十二月の條に、岡見すると有て、注に堀川百首に、ことだまのおぼつ

かなきにをかみすと稍ながらに年をこす哉後頼朝臣師走の晦日の夜、高き岡にのぼりて、蓑を

さかさまに著て、はるかに我宿をみれば、あくる年有べき吉凶の事見ゆるとなり、こと玉とは明年の吉相をいふ也。

〔繪本東名物鹿子二〕彌生の中の八日、近郷より蓑を持寄りて、淺草寺の門前に商ふ、是を淺草のみ。のいちといふ、
遊誠舎 沾意

蓑市や櫻曇りの染手本

○按ズルニ、蓑市ノ事ハ、産業部市場篇ニ詳ナリ、

雨衣
名稱

〔倭名類聚抄十四〕雨衣行旅具唐式云、三品以上、若遇雨、著雨衣氈帽至殿門前雨衣和名阿萬岐沼、今案

雨衣左右進油衣是

〔箋注倭名類聚抄六〕雨衣、阿万岐奴、今案、一云、雨衣、隋書云、煬帝遇雨、左右進油衣是、哀廿七年

左傳、成子衣製、注、製、雨衣也、按、敏達紀、是日無雲、風雨、大臣被雨衣、又、白河院幸高野、雨日、中宮大夫

師忠狩衣上著雨衣、見顯昭古今集注、長和三年、實資公祭太山府君、小雨、戲稱雨衣被大褂於吉平

朝臣見小右記、

〔隋書三〕嘗觀獵遇雨、左右進油衣、上曰、士卒皆露濕、我獨本此乎、乃令持去、

〔事物紀原三〕衣裘帶服雨衣

事始曰、凡雨衣、周已有、左傳云、陳成子衣製、仗戈、杜預注曰、製、雨衣也、是矣、炙轂子曰、帷絹油製之、及

油帽、陳始有之也、馮鑑又引左傳、楚子次於乾谿、雨雪、王皮冠、秦復陶、以證雨衣、按、虞闡父為周陶正、

注曰、陶復陶、白氏取為尚衣之職、杜預又以復陶為油衣、蓋若晉武所焚、雉頭裘、唐太平公主所服百